

金澤 泰子 さん (金澤翔子の母。書家)

<http://www.k-shoko.org/>

1943 年生まれ、明治大学卒業。書家の柳田泰雲・泰山に師事。  
1990 年、東京・大田区に「久が原書道教室」を開設。久が原書  
道教室主宰。東京芸術大学評議員。日本福祉大学客員教授。



主な著書

『愛にはじまる ―ダウン症の女流書家と母の 20 年』ビジネス社 2006 年

『天使の正体』2010 年 (改訂版)

『天使がこの世に降り立てば ―ダウン症の書家・金澤翔子を育てた母の日記』

かまくら春秋社 2010 年

『あふれる愛 ― 翔子の美しき心』どう出版 2017 年

片岡： 今月のインタビューは金澤泰子さんです。それでは翔子さんの書についてお伺いしながらインタビューをはじめたいと思います。

金澤： 翔子はテクニックがすごいというわけではありません。私も 60 年以上



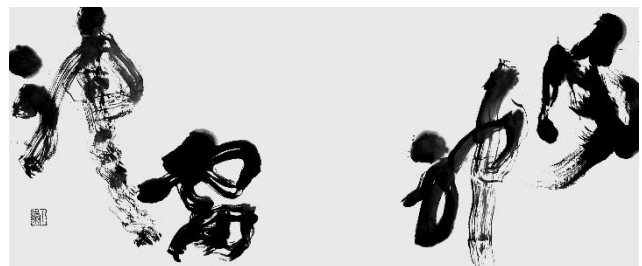
©Shoko Kanazawa

書をやっていきますので、テクニックは私の方が、ずっとうまいと思いますが、感動してもらったことはないし、涙を流した方もいません。でも翔子には、「僕は死のうと思っていたが、翔子ちゃんの書を見て、もう一度やってみようと思いました」という手紙を戴きます。生きる力を与えるような書なんて…。私とは次元が違って、純度が高い魂を持っているとしかいいようがありません。翔子は人に喜んで欲しいとだけ思って生きている子で、本当に優しく、人の苦しみは絶対に見逃せません。その美しい心が、私たちには見えなくなってしまった世界、宇宙の摂理みたいなものにつながっています。一般社会には入れないでいた翔子はマイナスだけと思われるかもしれませんが、実は、マイナスだけでなく、そんな素敵な世界とつながっています。その世界ではすべてが調和していて、ですから障害者であっても誰でもいるだけで十分な存在なのだと思います。

勿論、翔子だっていつも幸せ一杯というわけではありません。とても感受性が鋭いから…。翔子の大きな才能の一つは、今、誰が本当は悲しんでいるのか、苦しいのか見分けることで、サヴァン症候群のようです。そして、その人に寄り添う。そういう悲しみを受け取りながらも、翔子を通すと、どういうメカニズムかわかりませんが、明るさや力強く生きる喜びがでてきます。翔子をもし天才とって戴くのであれば、そこだと思えます。そして、そこでは、テクニックなんて、なんでもなく、書の神様が降りてくる…。

片岡： 代表作に「風神雷神」（京都建仁寺蔵）がありますね。

金澤： 翔子は、俵屋宗達の「風神雷神」を見たことがなかったのですが、宗達の雷の太鼓が切れているのと同じように、翔子の書も紙から切れているなど、同じような構図を感じます。宗達が持っていた美意識の空間と翔子は通じているのかもしれない。これは学んだものでもないし、教えたものでもありません。偶然といってしまうこともできますが、もしそうだとするとそれは幾つもの偶然が重ならなくては生まれません。その世界に通じているということではな



©Shoko Kanazawa

いでしょうか。だからこそ、建仁寺では、翔子の「風神雷神」の書を宗達が描いた国宝の「風神雷神」と並んで飾ってくださっているのだと思います。翔子には、そういう世界に通じていると思える不思議な書が幾つかあります。翔子は、そういう素晴らしい世界があるということを私たちに知らせてくれているのだと思います。翔子の素晴らしさは書道だけではなく、寧ろ書道はほんの一部です。彼女の生き方や彼女が見ている世界…。そうしたものは見えないから、ないということはありません。目に見えないものが逆に大きいのかもしれません。今の時代は寧ろ「見えないものはない」という迷信に生きているのかもしれない。我々は社会の中で生きてきて、どうしても効率性を求め、競争したりしますが、翔子はある意味で知的障害という環境に守られていて、一般の学校教育も受けていないし、人を妬んだり、羨んだり、世俗に対する欲望がなく、競争心を持たず、争うこともない、非常に穏やかで豊か、みんなに喜んで貰いたい、ただそれだけの思いで満たされています。その力は物凄いものです。

片岡： これまで私は、書には、一つ一つの字の意味があって、文章にも意味があり、そ

ここに調べがあって、それを書家が表現して…、勿論、書家自身の人生もあります。そういう捉え方をしていました。しかし、翔子さんの書は、そうしたものととは違った、何か大きなものがそのまましみ込んでくるような感じがします。

金澤： そうかもしれませんね。書家としてみると、例えば翔子は文言を選ばません。だから一人前の書家というには抵抗があります。「ダウン症という言葉を使うことは止めた方がいい」という方もいますし、「ダウン症を売り物にしている」という方もいらっしやいます。紙や墨は自分で用意できませんし、簡単な文言は選べますが、漢詩などは私が選びますし、意味も伝えています。一般に書家は、紙や墨、硯等を自分で選びますが、そこも私がやっています。しつらえも、屏風もそうです。だからといって、「一人前の書家じゃない書家」というのも変ですので、「ダウン症の書家」というのが翔子を表すのにわかりやすい言葉なのかなと思っています。

ダウン症の子は、勿論育つ環境によってずいぶん変わってきますが、基本的にもっているのは愛です。これは物凄く愛で、周りのみんなが幸せでないと困ってしまいます。ダウン症の人は1000人に1人といわれています。最初は「なぜ私の子が…」「私がどんな悪いことをしたのか…」と悲嘆にくれました。彼女自身が苦しんでいたわけではないのですが、親としては苦しかった…。でも今は「1000人に1人は、この世にこんな子がいていい、いや、いるべきだ、いた方がいい」と思えるようになりました。今、本心から「私たちは報われました、有難うございます」と言えます。そして昔と違って良い時代になって来ましたので、私は「いい子ですよ」「障害者には素晴らしい能力もあるのですよ」と運動しています。

ところで翔子は、自分の力では光りません。ダウン症ですから…。でも、親や周りの人たちの思いで美しく光ることができます。そして月は皆に照らし出されて、そこにあるだけで十分な存在です。翔子は小さい時から、三日月になりたいといっていました、本当に三日月になれたのだと思います。

片岡： 皆の思いで光る月の書ですね。ダウン症であったからこそ、多くの人々の心を揺り動かす書を生み出している…。それにしても大変なご活躍ですね。

金澤： 翔子が二十歳になってから、突然、何のビジョンもなく、この生活が始まりました。どんどんやってくる色々な仕事にお応えしているうちに、数々の神社仏閣での奉納揮毫やNHK大河ドラマ「平清盛」の題字、天皇陛下の御製天皇の詠まれた短歌を揮毫させて戴き、美術館が4つもでき、紺綬褒章も受章しました。また国連本部（ニューヨーク）でスピーチをし、ヨーロッパ、北欧、シンガポール、ドバイ、サンクトペテルブルクなど世界から声がかかるようにもなりました。尤も、翔子には国連でスピーチするのも、近くの公民館でスピーチするのも同じで、寧ろ近所であれば知っている人がいるからもっと嬉しいのではないかと思います。

片岡： 翔子さんの才能を引き出し、サポートして、世の中に出していく、その手腕も素晴らしいですね。

金澤：      どんな大物プロデューサーが後ろにいるのですかとよく聞かれますが、そんなことありません。勿論、いろいろな皆様がご支援くださっていますが…。結論からいうと、仕組まれているのだと思います。偶然というか、必然というのかわかりませんが、その重なり合いの中で、そういうめぐりあわせになった…。「神は朝顔の咲く刻さえ正確に設定している、ましてや人間に対しては…」という本を若いころ読みました。例えば、翔子が私のところに生まれてくる、そのために私は楷書という少し退屈なことをずっとやっていた。私の両親も、そして主人の両親も、主人も、プロにはならなかったのですが書道をやってきました。そこに費やした膨大な時間や思いがあって、翔子に絞り出されたようなことがあるのではないかと思います。今後どうなるかわかりませんが、私の力が及ばないところで動いているものが大きく、やらざるをえないものやってきましたというところもあります。

          ところで私は、いっぱい抜けているところもあるし、小さい時からぼんやりして、みんなとも違って…。社会音痴ですが、それでもチャンスが見えるのかもしれない。例えば若いころ、文人や芸術家たちが集まるサロンを作り大変な評判でしたし、10年に一度くらい大きく動き、成功しました。その間は、割と安心していて、何があっても、お任せしますという感じです。勿論、現場で色々ありますが、大きくみれば「いいじゃない」って思います。

片岡：      大変な数の揮毫や講演もなさっていますね。

金澤：      翔子の書や私の講演を励ましとしてくださる人がいるのであれば、こんなに嬉しいことはありません。そして、障害者のお子様を持つご家族の力になれるのであれば、休んでいられません。それに、今の成功は、皆さんが支えてくれたもので、私たちが自分で勝ち得たものではありません。そういう責任もあります。だから、キャンセルしたことはありません。一回だけ、翔子が骨折したときに休んだだけです。私も一昨年、大腿骨を骨折しましたが、手術後逃げのように退院して名古屋まで行き、そのまま仕事を続けています。ボルトが入ったままですが、いつの間にか治ってしまいました。よく体に気を付けてくださいといわれますが、待ってくださっている方のことを考えると、休むなんてできません。私たちの生活は弁当ばかり、洋服も買う時間がないのでずっと同じです。電話で同じものを取りよせて、同じデザインの服が8着もあります。インナーも1着買うときに3着ぐらい買って…。

          皆さんがお仕事を下さって、それで、翔子と行くと、どこに行っても「この会館始まって入りだ」などといって下さいます。翔子は皆さんが喜んでくれますので、一生懸命、踊って、逆立ちだっけます。ただただ喜んで欲しいだけです。私も翔子を胸に抱いて泣きながら育てて、その涙を翔子がぬぐってくれていた。申し訳なくて…。翔子は、母親が救われていない、悲しんでいる、ずっとそう感じてきた。だから書道もやってくれていたのだと思います。私もそんな経験をしてきましたから、障害者のお母さんたちに、元気な翔子を見て戴こうと、どこにでも連れて行



っています。知能がなくて歩けないといわれた子が、こんなに元気に育って、違う知性が生まれていますよって、言っています。

でも、7、8年前だと思いますが、障害者の集いがあった、そこでお話をさせて戴き、本も売ってくださることになっていました。ご年配の方が、体の大きな知的障害を持つ年を取ったお子様の手を引いてきておられました。私なんか講演なんてできない、本だって売れないと思いました。そして来ていた記者に、ずっと大きな障害を抱えた子供を育てて、将来にも不安を持っている。私の場合は、まだ翔子が成功していますが、彼女たちは、そうはいかない。そんな人たちがどういう思いで育ててきたのか、話を聞いてくださいと頼みました。その記者は、彼女たちはあまり表現ができないから…と言っていました。私はどんなお母さんでも、障害者を育てたお母さんを尊敬します。

ところで、ある時、泣きながら赤ちゃん連れのお母様が来てくださって、出生前診断で、医師が「この子はダウン症です。でも、金澤翔子ちゃんという素晴らしい書家がありますよ」っておっしゃったので、私の本を全部読んで、生むことにしたと言ってくださいました。本当に涙が止まりませんでした。神奈川のある病院では翔子の「心」という字を飾ってくださっていて、その前で診断を伝え、翔子の話をしているそうです。翔子がいて、命を受けた子供たちがいる…。心が揺さぶられました…。

また鎌倉の建長寺では毎年、ゴールデンウィークに個展をしてくださっていて、次で10回目になります。毎年、沢山の障害者の親子連れがきてくださっていてメッカとなっています。だから管長さんは「自分が生きている限りは絶対に止めない」といつてくださっています。凄いことが起きています。

よく日本のダウン症の子の地位を上げてくれたと言われます。あなたの子は知能が低く歩けないなんて言われると地獄です。私も一度来た道です。ですから、「いい子です」「いい子です」って言いまわっています。そして少しでも多くの人に見て戴こうと翔子を連れまわっています。

片岡： ダウン症の医師がいるという話を聞いて、それが事実かどうかわからなかったけれど、大きな支えになったという話のご著書「天使の正体」（かまくら春秋社）にございましたが、今はその役割を、しかも現実のものとして翔子さんが担っていますね。

金澤： 本当にそうだと思います。ダウン症の医師の話は本当の話ではなかったのだと思いますが、当時の私にとってはそんなことが本当に希望でした。あの時に、一人でも今の翔子のような元気な子がいたら、私はあれほど泣きながら育てることはなかったと思います。

片岡： 当時は想像以上に難しい時代でした…。

金澤： 1985年、私が42歳の時に翔子が生まれました。それまで、私はいいきになっ

て、「知的でないものは美ではない」などと酷いことを言っていました。そこにダウン症の翔子が生まれてきたのですから、鉄槌だと思いました。そして「なぜ、私ではなく、子供にこないといけないのか…」と神を呪ったこともあります。一緒に死のうともよく思っていました。当時は情報もなく、翔子が小学校に入ったときには、マイナスしか考えられず、「いてはいけない存在だ」と感じていました。ですから小学校に入って普通学級に通えた時は嬉しかった…。でも実際に学校に行ってみると、か弱くて、渡り廊下も歩けない…。そんなとき先生が「翔子ちゃんがいるおかげで、クラスが穏やかになるし、みんな優しくなれる」といつてくれました。この時、はじめて「いていいんだ」と思えました。

またある時、本で「神はこの世に不要なものは作らない」というフレーズを見つけました。「そうか、翔子はビリをやればいい。そうすれば成績の良くない子は落ち着くし、ビリという役割があるのだ。少しでも良くしようというのはやめて、ビリでいこう。神が不要のものを作らないのであれば、翔子はそれでいいはずだ」と。ビリと決めてからは道草をしたり、空を見たり、色々なことをして…、少し気を楽しめることができるようになりました。翔子は喜んでビリをやってみんなを喜ばせていました。

そんな中で、翔子にお友達ができればと書道教室をはじめました。

片岡： 教室には色々な皆様が通っておられますね。

金澤： 翔子のお友達ができればと 3 人から始めました。来てくれるだけでうれしいのですからお金を払ってなくても、払わなくても、やりたいという人はどうぞどうぞと。それでクラスの子がたくさん来てくれるようになって、そうして今では 200 人くらいになっています。ただ一つだけ守ってきたのは、どんな人も受け入れるということです。障害者も大人も子供一緒、まったく垣根がありません。最初からずっとそうです。静かに凄い作品を書いている人の横で、子供が騒いだりして…。なぜかという翔子が障害児だということで、当時、受け入れてもらえないことばかりでしたから、親は物凄く落ち込みます。色々なことがありましたがどんな方も受け入れてきました。

クラスの皆も喜んでくれて、うまくいっていたのですが、ある時学校から「4 年生になったらこの学校ではもうあずかれないから、遠くにある養護学校に行くように」といわれました。これはショックでした。今思えば、実際に受け入れるのは難しかったのかもしれませんが、当時は「やっぱり障害者はいてはいけないんだ…」と。学校とも対立して、それで書道教室に来てくれている人たちが応援して下さったのですが、結果的に大ごとになっていきました。結局、学校に行くのを止めて引きこもりのようになって…。苦しかったですね。でも時間だけは膨大にあるので、仕方なく、翔子に般若心経を書かせることにしました。276 文字もあり、また大きな紙に書かせたこともなかったもので、無謀なことでしたが、そんなことでもし

ないと…。

さて、親子って難しくて、直ぐ怒ってしまいます。「なぜこんなところで間違っの」、「なぜまがっちゃうの」、「こんなことがわからないの」…、普段、そんなことは絶対に言わないのですが、どうしても口にしてしまいます。そんな時でも、翔子たちのようなダウン症の子供たちは、「いやだ」「やめて」「なんでやらなきゃいけないの」といったマイナスの言葉は絶対にいいません。それでも、叱られている状態が悲しくて、はらはらと泣きながら書き続けます。涙が紙に落ちているのに…。そして、一行書き終わると、墨を乾かすのに休むのですが、かならず、私に「有難うございました」という。翔子の方がずっと疲れているはずなのに、私にあったかいミルクティーを入れてくれたりする…。そうして 10 回くらい書きましたので、全部で 3000 字ほどになります。それを、きちっと楷書で書きました。この時に翔子は書の基本が身についたと思います。この時の涙の跡が残る般若心経は「涙の般若心経」といわれ大変人気のある作品となっています。

そうして半年くらい休んで、仕方なく遠くにある養護学校に通い始めました。翔子は学校に行くようになると、とても喜んで帰ってきました。それに遠いので、電車に乗ることも覚えたり、足も強くなりました。ずっと翔子と二人で苦しんできたと思っていたのですが、喜んで帰ってきた翔子を見ていると、私が間違っていたと思いました。翔子が自分の思うような子ではなかったのも、私一人が世間体を気にして、また将来に対する不安を抱えて苦しんでいただけで、翔子はちっとも嘆いても苦しんでもいなかったのです。

そうして中学・高校と進み、18 歳になると卒業です。当時、翔子は「仕切り屋翔子」と言われるくらいでしたので、作業所に入れば楽しくやっていると、良い作業所を探しました。幸い良いところが見つかり入所も決まりました。しかし、入所の説明会の時に、作業所へ渡すはずだった内申書が間違っ親に配られました。そこには、私について、翔子の世話を人に任せて親としてだらしがないというようなことが書いてありました。私にも理由があります。当時、主人を突然の心臓発作で亡くしたばかりでした。主人は親から継いだ会社など 13 社を経営していました。まだ 52 歳でしたので、誰も死ぬなんて思っておらず、何の準備もできていなかったのが大変でした。また、いきなり借金が出てきたり…。それでも国内はまだ、会社の方がだいぶやってくれたのでいいのですが、主人はヨットをやっていて、そのために作ったような海外の会社もあって、それは会社の人間ではわかりません。だから私が閉めに行くしかありませんでした。私には 7 歳下の妹がいて、翔子を実の娘のように可愛がってくれていました。しかし、夫の死後、彼女も末期ガンといわれ、そのまま亡くなってしまいました。そうしたこともあって、翔子を人に預けて海外に行くしかなかったのです。そのことをだらしがないといっていたのです。これは当時の私には、とてもきつ、入所を辞退してしまいました。しかし、その

後が大変です。翔子はどこに行くこともできませんし、友達は働きに行っていますので会うことができません。新しい友達も簡単にはできないし…。

そんな時、主人が「翔子が二十歳になったら個展をしようね」とっていたことをふと思い出しました。「翔子の素敵な書を飾った個展をやって、皆を呼んで、ダウン症だということもお披露目しよう」と。翔子がダウン症だということをそれまで隠してきていましたので…。これは主人の遺言だ、翔子に個展を開いてあげようと思い、大きな字なども教えることにしました。

片岡： 個展は大変な反響だったそうですね。

金澤： 私は一回限りの個展だと思っていて、20点ほど作品を出し、作品集も作って、銀座書廊で開きました。翔子は私がなくなった後は、身寄りがなくなりますので、施設にあずかってもらうことになります。そんな時、この作品集があれば、翔子はこんな素敵なことをやった娘さんだと思ってもらえるはずだと、とてもいいものにしました。そうしたらメディアの方がたくさん取り上げてくれて、沢山の方が来てくださって…。また個展に来たお坊様や美術館の方々が、「うちでやりましょう」と声をかけてくださって、次々と個展を開くことになり、去年までで290回、のべ100万人を超える方々にご覧戴いたと思います。

ですから個展を開いてからは、私たちは急に幸せです。尤も翔子は作業所に行った方が幸せだったのかもしれませんが。仕切り屋ですから親分になって…。でも親の私はやはり嬉しいですよ。自分がやってきた道ですから…。そんな私を見て、翔子も本当に喜んでくれています。

もし苦しみの中に落ち込んで般若心経を書くことがなければ、もし作業所にいらしたら、今の翔子はいません。闇の中には大きな光があります。今の時代は幸せでなければいけないというような風潮もありますが、幸せがあるときにも何かありますし、闇の時にも、きっといつか幸せになるための何かがあるのだと思います。闇の中に落ち込むと必ず大きい光が待っている。寧ろ、闇の中にこそ光があったり、闇も光も一緒に起きているのだと思います。

今の社会では、翔子たちはマイナーな人間、障害者といわれますが、私は、ちっとも嘆きません。不都合なことはありますが、普通の人にはできないような、もっと大きな世界に繋がっているのですから。

当時、翔子が普通の学校に入れなかったのも、すごく悲しかったけれど、今では入らなくて良かったと思っています。ルールがなかったから、独自にやるしかなかった。今は障害者や母親が皆で固まったりしていますが…。でもやはり障害者は普通ではないわけですし、障害の程度も全然違うわけですから、手をつないだからといって、ルンルンで育つわけではありません。また、例えば障害者の大きなダンスの会があるのですが、同じステージに100人くらいが上がります。子供たちは、楽しくて踊っている人もいれば、いやいや上がっている人もいます。しかし、親た



ちは、「うちの子の方がうまいのに何故、場所が悪いの?」「出演時間が短いの?」と。「ダウン症で生まれたのに、なぜ、わざわざこんなところで競争させるの」と思うことがあります。どこかに入ったら、やっぱりどうしても、みんな同じところに行かないといけないと思ったり、比べたりしてしまいます。属さないということは、やはり反発も大きかったんですよ。もし入っていたら、せっかく独自のものをもっていても翔子は書家にはなれなかったと思います。「やっぱりちゃんと学校に行かないといけないでしょう」「あなただけ何故こんなに…」と皆に合わせることばかり考え、秀でることは出来なくなってしまいます。勿論、秀でなくてもいいのかもしれないかもしれませんが、せっかく学歴社会から外れているのですから…。特殊な 1000 人一人の子を授かっているのですから、やはりいつも手を繋いで…とはいきません。

主人が「1000 人に 1 人だけ授かったんだよ、だから大事にしよう。生まれなかったよりよかったんだよ」とよくいっていました。しかし当時私は、ダウン症の子はいてはいけない、一緒に死のうとまで思っていましたので、「何を馬鹿なことを言っているのか」と思うこともありました。翔子は出産直後、敗血症にかかって、主人との交換輸血で助かりました。その時、主人は、私が帝王切開後まだ寝ている間に、医師から「折角、交換輸血をして助けましたが、まだダウン症という障害があります。どうしますか」と聞かれたそうです。彼はクリスチャンでしたので、「僕は神の挑戦を受け入れるとって助けたんだよ」と時々嬉しそうに話していました。私は「有難う」と応えていましたが、本心では「なぜ助けたの…」と思うこともしばしばでした。後になって「僕が助けたことが良かったと、心から喜べる日が来たでしょう」と、主人はわかっていたのですね。そして結局主人が正しかった。

ところで、翔子とロックフェラーセンタービルの最上階のレストランでインタビューを受けたことがあります。その時、「今までで、一番高いところは」と聞かれ、翔子は「お父様の肩車」とこたえました。父親の愛情の高さだったのでしょう。

片岡： 障害者を持つ親の皆様にとって、自分が先に逝く、ということは…。

金澤： 一番苦しいことです。障害者を持つ親は 2 度苦しみます。生まれてきたときに、ドーンと苦しんで、やっと立ち直って幸せになってきたときに、今度は自分が我が子を残して死んでいかないといけないという苦しみがあります。本音でいうと翔子と一緒に死にたい。飛行機に二人で載っていると、今落ちれば一緒に死ねると思うこともあります。或いは、看取って死にたい。普通の親には一番苦しいことかもしれないかもしれませんが、翔子は幸せに死ねるのですから、いいのかもしれない。私はさみしくて苦しいけれども「よかったね」といえるようにしたいと思っています。勿論、そうはいつでも後のことも考えています。以前は、ある個人に託そうと思ったこともあります。やはり難しいことも多く、今は、チームに託そうと思っています。

ところで、今、翔子は一人暮らしをしています。自分自身でご飯を作って食べるときめて、必ずそうしていますし、時間なんてわからなかった子が、自分で管理で

きるようにもなりました。世俗への旅立ちで、少し俗っぽくなってきましたが、生きていけないといけませんから…。ですから翔子のような子でも暮らしていけるんです。勿論、皆さんとは違いますが、それでいいのだと思います。そして町の皆さんが、丸ごと翔子を受け入れてくださって、幸せいっぱい生きています。

片岡： 貴重なお話を有難うございました。

<完>

聞き手 片岡秀太郎 [プラットフォーム株式会社](#) 代表取締役